「日韓学生フォーラム」体験記 2回目は広島、韓国からも8人

被爆国日本が取るべきスタンスやジャーナリストの役割を考える

ジャーナリストを目指す日本と韓国の学生が、交流を通じて互いの国を知る「日韓学生フォーラム」が8月5日～8日、広島市で開かれ、韓国の女子大生8人を含む約30人の学生が参加した。現役の新聞記者やOB・OGが実行委員を引き受けて昨年11月に第1回をソウルで開き、日本での開催は初めて。今回は広島の原爆の日に合わせ、核廃絶の機運が高まる中で日本が被爆国としてどのようなスタンスを取るべきか、ジャーナリストとして何ができるのかを考えてもらった。

5日には、新聞労連などマスコミ関係労組が開いた核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）国際運営委員の川崎哲さんの講演を聞き、6日は平和記念公園の式典に参加。地元紙の『中国新聞』を江種則貴・前編集局長の案内で見学し、核廃絶に取り組んだ平岡敬・元広島市長や、在日韓国人被爆者の李鐘根さんらの証言に耳を傾けた。来年4月から実際にジャーナリストとして働く6人の日本人学生と韓国・梨花女子大の学生が、体験や感想を報告する。

新崎盛吾・元新聞労連委員長

平和記念式典

抑止力に頼りながらどうやって「核のない世界」目指すのか

平和記念公園で6日に開かれた式典の張り詰めた空気は、安倍晋三首相のあいさつが始まると徐々にしらけていったように感じた。核兵器禁止条約に直接言及せず、「核兵器国と非核兵器国双方の協力が必要」と述べるにとどまったからだ。日本の立場については「非核三原則を堅持しつつ、粘り強く双方の橋渡しに努め、国際社会の取り組みを主導していく」と強調したが、説得力はなかった。

核兵器禁止条約は、昨年7月に国連で122カ国・地域の賛成を集めて採択され、今年8月時点で60カ国が署名した。日本は被爆国でありながら、条約交渉会議にすら参加していない。安倍首相は1月の国会答弁で、北朝鮮の脅威を理由に「米国の抑止力を維持していくことが必要不可欠」と強調した。

この政府の姿勢に対し、広島市の松井一實市長は「核抑止や核の傘という考え方は、（略）極めて不安定で危険極まりない」と平和宣言で指摘。湯崎英彦・広島県知事も「核抑止のくびきを乗り越え、新たな安全保障の在り方を構築するため、世界の叡智を集めていくべきだ」と訴えた。長崎市の田上富久市長も9日の長崎平和宣言で、条約への賛同とともに世界を非核化に導く道義的責任を日本政府に求めた。政府は核抑止を絶対視することなく、安全保障政策への異論に耳を傾けるべきだろう。

安倍首相は一方で、核兵器の非人道性を、「世界に伝え続ける務めが我々にある」とも述べた。核抑止力に頼りながら、どのように被爆の記憶を継承し、「核兵器のない世界」を目指すのか。国際社会に具体的な方針を示すことができなければ、橋渡しの役割を果たす資格すら認められないはずだ。

藤谷和廣、北海道大学4年

広島市の平和記念式典（8月6日）。

碑巡り

被爆の実態を後世に伝える道しるべ

5日夜から6日にかけて、平和記念公園とその周辺に残る慰霊碑や記念碑など原爆の爪痕を見て回り、人々の暮らしや街並みが原爆によって一瞬にして消し去られたことを実感した。今の広島は、多くの犠牲者の上につくられている。物証として残る碑には、見る者に想像力を通して追体験させる力があった。

強い日差しが照り付ける6日午前、「ヒロシマ ピース ボランティア」の横山まきこさん（52歳）の案内で慰霊碑を回った。

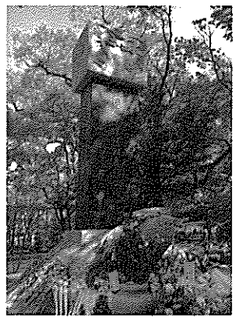
「73年前にこの場所で何があったのか、碑などの遺構があるからこそ知ることができる」。今も引き取り手のない約7万人の遺骨が納められているという「原爆供養塔」の前で、横山さんは私たち学生に語り掛けた。地下に眠る名もなき犠牲者たちの無念を思うと、あらためて原爆の恐ろしさや苦しみ、虚しさを感じずにはいられなかった。

5日夜には、爆心地直下にあった「島病院」や、市内中心部で被爆し再建された百貨店を訪れた。にぎやかな街並みを眺めながら、人々の日常の上に原爆が落とされた残酷さに思いをはせた。

横山さんは、平和記念公園が当時の地表から70センチメートルほどかさ上げしてつくられていると教えてくれた。一帯は有数の繁華街だったという。私の踏みしめるアスファルトの下にも、今と変わらない生活があったのだ。

今回広島を訪れて感じたことは、時の流れとともに原爆の記憶が遠のき、無理解や無関心が広がることへの危機感だった。しかし、いずれ被爆者が語ることができなくなったとしても、慰霊碑はかつての被爆の実態を後世に伝える道しるべになると信じている。

朝比奈由佳、東京女子大学4年



横山まきこさんの話を聞く参加学生（写真右）と韓国人原爆犠牲者慰霊碑。

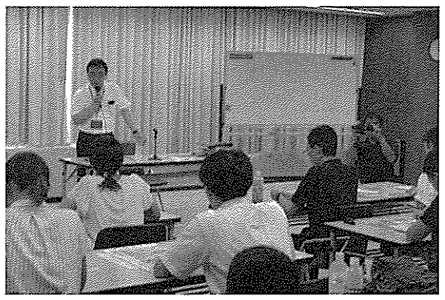
中国新聞社訪問

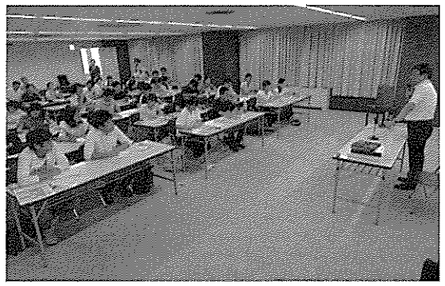
「8月6日は原点」、江種・前編集局長から話を聞く

「戦後の焼け野原から出発したわが社にとって、8月6日は忘れてはならない原点だ」

戦後から73年が過ぎた同じ日、平和記念公園横にある中国新聞社本社を訪れた学生たちを前に、江種則貴・前編集局長が静かに語り掛けた。軍国主義体制の下、戦争賛美へと世論を誘導してしまった反省から、現在の社是には「民主国家の建設」と「世界平和の確立」がうたわれている。「過去と向き合い、事実を伝えていくことが報道の使命だ」と、江種さんは強調した。

1945年8月6日、現在は広島三越が建つ市内中心部の中国新聞旧本社から約900メートル離れた場所で原爆が炸裂。当時の社員の3分の1に当たる114人が犠牲になった。地元の新聞社として、核兵器がもたらす惨状を世界に発信し続けてきたが、時代の経過とともに被爆体験の風化が進み、いかに後世に伝えていくのかが課題になっているという。現在の日本の若者にとっては戦争そのものも、遠い過去の歴史的事実と





学生たちに語りかける江種則貴『中国新聞』前編集局長（写真上）と真剣に話を聞く学生たち。

してイメージされることが多いだろう。

「事実を広く世の中に伝える上で、どのようなことを意識していくか。ジャーナリストを志望する若者に考えてほしい」。最後に江種さんが問い掛けた。

SNSが発達し、発信力を持った人々の声が拡散される世の中で、発信力を持たない人の声は埋もれがちになってしまう。声なき声と向き合い、取材を通じて社会に伝えていくことが、今の時代に求められるジャーナリズムの役割ではないかと、自分なりの答えを出してみた。　山川信彰、日本大学4年

平岡敬・元広島市長
「なぜジャーナリストなのか、なった後も考え続けて」

「なぜジャーナリストなのか、実際になった後も考え続けてほしい」――。元『中国新聞』記者で、1991年から99年まで広島市長として核廃絶を求め続けた平岡敬さん（90歳）は、「若い世代へ伝えたいこと」と題した講演会で、記者を目指す学生や市民ら約100人を前に力強く訴えた。

記者時代に在日朝鮮人被爆者の問題を初めて取り上げた平岡さんは、日本の植民地だったソウルで過ごした自らの幼少期に「初めて朝鮮人差別を意識した」と振り返り、「弱きを助け、強きをくじくのがジャーナリストの使命だ」と考えて報道を志したという。来春から記者として働くことが決まった私は、改めてジャーナリストの役割を突きつけられ、覚悟を問われた気がした。

平岡さんは「かつては世のため人のためという志でジャーナリストを目指したはずなのに、最近は世の中全体が豊かになったためか、そのような意志が感じられない」と指摘。日本のジャーナリズムの萎縮や衰退につながっているとの見方を示した。過去の戦争を教育やマスメディアが後押ししたことにも触れ「平和を維持していくためにも、ジャーナリストの役割は重要だ」とも強調した。

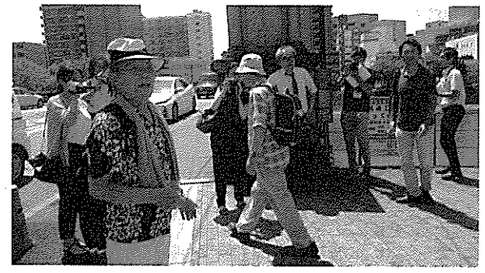
講演する平岡敬・元広島市長。

戦後から73年がたち、戦争の体験を語る人々が減り続ける今だからこそ、ペンの力をどのように生かすのかが問われる時代になるだろう。一人の記者として「弱いものを助け、不正義を許さない」という意識を根底に持ち続ける大切さを改めて感じた。　I・I

在日韓国人被爆者
傷以上に苦しめられたのが差別との闘い

「茶色がかった黄色い閃光が、一瞬で辺りを覆いました」。在日韓国人被爆者の李鐘根さん（90歳）は、73年前と同じように太陽が照りつける炎天下の中、自身が被爆した荒神橋のたもとに立ち、集まった学生らに熱心に自らの体験を語り始めた。

鉄道員として勤務していた李さんは、的場町停留所で下車し、出勤する途中だった。荒神橋を渡った時、突如閃光が襲い、反射的に顔を手で覆ってその場に伏せたという。爆心地から約2キロ。頬や首、手などにやけどを負い、傷痕にはうじ虫が湧いた。傷は半年ほどで治ったが、それ以上に苦しめられたのが差別との闘いだった。


被爆現場で体験を語る李鐘根さん。

職場復帰後も居づらさを感じて間もなく辞め、個人経営のリサイクル店などで生計を立てた。偏見を恐れて被爆について証言することはなかった。李さんの母は、在日朝鮮人だと分からぬよう弁当にキムチを洗って入れる人だった。そんな母が被爆直後、傷ついた息子に「早く死ね」と言い放った。在日としても被爆者としても差別される息子の将来を哀れむ気持ちから出た言葉だった。

「お母さんは私を抱いて『アイゴー』と言いながら泣いていた。ポトポトと落ちてきた涙の温かさは今でも忘れない」

被爆者として世界一周の航海に招かれたことが転機となり、2012年から被爆体験を語り始めた。今では原爆資料館の委託を受け、戦争や核の愚かさを子どもたちに語るようになった。生きがいを尋ねると「生きようとすること。楽しもうという気持ちだね」。明るい言葉が重く感じた。

韓国の学生が思ったこと
韓日学生、互いを理解し合った時間

川は市内を横切っていた。水は光り輝き、川辺の枝は風に吹かれてゆらゆらと揺れていた。空は雲一つない青さで、日差しは強かった。原爆が落とされた日、被爆した人々が飛び降りた川と黒い雨が降ったその空の下に私たちは立っていた。広島では、いま私が踏んでいる地がそのまま誰かの墓だという。韓日の学生の誰もが無言だったが、理解できた。言葉や国籍が違っても、思いは同じだった。

日韓学生フォーラムが行なわれた3泊4日は、韓日の学生が互いを理解し合う時間だった。特に、歴史について多くを話した。広島に来る前は心配だった。韓国は日本を「近くて遠い国」と呼ぶ。物理的な距離は近くても心理的には完全に近いとは言えないからだ。フォーラムに参加し広島の惨状を聞いて胸が痛んだが、一方で両国の歴史認識の違いからくるもどかしさもあった。このもどかしさがどこからくるのかを知りたかった。

韓国人原爆犠牲者慰霊碑を見てどんな感想を抱いたのか、日本の学生たちに聞いてみた。学生らは、「日本の歴史教科書には載っていないのでまったく知らなかった」と答えた。このことによって意思の疎通が図れなくなった。共通の問題意識を持てないのに、どうして両国の距離感を縮められるだろうかと思った。

もちろん、平岡敬・元市長のように問題提起をした日本人、韓国人原爆犠牲者慰霊碑を平和記念公園内に移転させるために声をあげてくれた日本の市民団体の存在がある。しかし、まだ道は遠い。ある日本人学生は私に、「大多数の日本人は加害国としての歴史を知らないだろう」と語った。これから歴史を勉強し直すと誓った日本人学生もいた。

ジャーナリズムに関しても議論し合った。両国のマスコミ文化には類似点が多い。実際、韓国の記者たちは「サツ回り」という言葉を使うほどだ。

両国の学生が最も関心をもったテーマは災害報道。韓国では数年前「セウォル号」事件を報じるマスコミの役割について、多くの市民らが問題提起をした。被爆者報道、広島の豪雨報道など、トラウマを誘発する報道では日本のマスコミも問題意識を共有していた。どのような報道の仕方が望ましいのかを考える時間を持った。

原爆で亡くなった記者らの追悼式では韓日の学生が共に献花。戦争のためにはペンもカメラも持たないという記者魂を心に刻んだ。

夜になると、数々の色の灯籠が元安川を埋め尽くした。「どんな記者になりたいか」という質問に対する答えが、灯籠によって明るくなっていく川のように、だんだんとはっきりとした輪郭になって近づいてくる気がした。葛藤ではなく社会統合のためにペンを握る記者になることを、韓日両国の間に横たわる痛みを真に克服するために、いまだ解決されない歴史にも関心を持つ記者となることを誓い、灯籠を流した。

私たちはしばらくの間、無言のまま流れ去っていく灯籠をじっと見つめていた。数々の支流が合流して一つの川になるように、その瞬間、私たちは一つの夢を描いたと確信した。

チョン・ジニョン、梨花女子大フロンティアジャーナリズムスクール記者班。翻訳／文聖姫（編集部）

『中国新聞』を見ながら議論する日韓の学生。

自らを「普通の主婦」と名乗るイトウソノミさんが制作した映画『狂夏の烙印（らくいん）　在韓被爆者になった日から』も上映された。日本人と同じ苦しみを味わいながら、韓国に戻っただけで当初は支援が受けられなかった韓国人被爆者の証言を追ったドキュメンタリーだ。

会場には、米国在住の被爆2世、三宅（みやけ）ストーナー展子（のぶこ）さん（66歳）の姿があった。学生時代に米国で原爆展を開いた際に韓国の留学生と知り合い、在韓被爆者の問題を意識し始めたという。「イトウさんは被爆者の方々に寄り添い、一歩ずつ歩んで来られた方だと思います。多くの日本人が知らなくてはいけないと感じました」と話していた。　D・K、Y・N

写真提供／日韓学生フォーラム